

命を預かるということ

明戸中学校 3年 船橋 さやな

皆さんは、日本で行われている犬や猫の殺処分の数を知っていますか。平成30年度の調査によると、その数は犬と猫の合計で約38,000件に及びます。ちなみに、平成16年度の調査では約394,000件となっていました。この数字だけを見ると、殺処分の数は十数年前と比べるとはるかに少なくなっていることがわかります。しかし、全くゼロになったというわけではありません。そこには、約38,000匹の尊い命が、人間の身勝手な都合により失われているという事実があります。そして殺処分となるのは、人間の手から離れたことや過去に虐待を受けていたことが原因となって、完全に野生化してしまったり、里親を募集する譲渡会に出ることができない個体が多いのです。もちろん、捨て犬や捨て猫などを長期間保護するためには、多くのお金や施設が必要です。また、里親を探すこと自体が難しいのも事実です。

そう頭では理解していながらも、やはり何の罪もない動物が何万匹も殺されているということ、またそれに対して、私にできることがとても少ないという現実、怒りや悲しさ、悔しさを強く感じます。

ではなぜ、殺処分はなくなるのでしょうか。さまざまな原因が考えられますが、その一つに、日本のペットショップでの子犬の販売方法に問題があると思います。なぜなら、ペットショップで購入された子犬や子猫が捨てられるというケースは少なくないからです。最初は「可愛い」と思って購入したものの、子犬や子猫はたった1年でも大きく成長するため、「言うことを聞かない」「無駄吠えが激しい」などといった理由で捨てられてしまうことが多いのです。その際、犬を飼うとどのような生活になるのか、またどれほど大きく成長するのかといった説明が店から事前にされないこともあります。もちろん、ペットショップの側からすれば、子犬や子猫が売れなければ利益を出すことができないことも理解できます。しかし、目先の利益を出すためだけに、尊い命を無駄にして良いわけでは決してありません。

ところで、ペットショップと聞くと、私たち日本人は店頭ショーケースに犬や猫がいる様子を想像しますが、欧米の人からすると、それは珍しいことなのだそうです。特にイギリスやドイツといった、動物愛護先進国といわれる国では、ペットを飼うことについて、数多くの法律が存在します。例えばドイツでは、屋内で愛犬を飼育する場合、昼夜の生活リズムを確保するために、自然光の確保や新鮮な空気の供給が確実に保証されている場所でなければなりません。他にも、毎日数度に渡って飼い主と過ごすことも法律で定められており、長時間の放置を近隣住民から通報された場合、動物虐待として厳重注意を受けることになるそうです。このように、動物の視点から動物の権利が保護されているのです。そしてペットショップでの生体販売も簡単にはできず、ペットのご飯やグッズだけを取り扱う店がほとんどとなっており、欧米からすると日本のペットショップはとても珍しいことがわかります。

私は、日本のペットショップ業界が、目先の利益だけを求めるのではなく動物の命を大切にすること、そして購入する人が命を預かる責任をしっかりと持つこと。この二つを意識することで殺処分の数を減らすことができると考えています。また、私は将来、動物愛護団体などでボランティア活動をしたいと思っています。そして、生まれてきた全ての命が、たくさん愛され、幸せにその生涯を終えることができることを心から願っています。

最近、新聞やテレビで児童虐待に関するニュースをよく見かけます。私はそんなニュースを見聞きすると、「なぜ自分の子どもを大切に思えないのだろうか。どうしてこんなことができるのだろうか。」と、疑問を持ちます。そんな時、気持ちは暗くなり、とても悲しくいたたまれない気持ちでいっぱいです。

虐待された子どもの中には、生まれたばかりの赤ちゃんや幼い子どもがたくさんいます。中には命を落としてしまう子もいます。たった一つしかない大切な大切な命です。虐待を受けた子どもは、精神的にも身体的にも深い傷を負うのでしょうか。とても辛くて苦しい記憶を抱えることになります。虐待をする理由は様々であると思いますが、多くは育児ストレスが原因であるように思います。児童虐待について気になったので、調べてみました。厚生労働省の「児童虐待の定義」は大きく分けて次の四つだそうです。一つ目は殴る蹴るなどの身体的虐待。二つ目は子どもに性的なことをさせる又は行うなどの性的虐待。三つめは家に閉じ込める、食事を与えないなどのネグレクト。そして四つ目は言葉による脅し、無視をするなどといった心理的虐待です。これらの虐待は年々増加傾向にあり、厚生労働省が調査を始めた一九九〇年度から増加し、昨年度は過去最多で、ここ五年間で二・六倍になっているそうです。私は虐待をする親の立場に立っても考えたいと思いますが、まだ中学生でわからないことばかりです。きっと虐待している親にも何かしらの理由があるのでしょうか。性格や環境、社会的な問題も大きく影響しているはずです。

私には、年の離れた妹がいます。普段はとてもかわいい妹ですが、気にいらないとすぐに泣いたり、わがママを言ったりして、私や母を困らせます。疲れていたり、気持ちに余裕がないときは、つい「うるさいな、あっちへ行ってよ。」と、大声を出したり、いやな態度をとったりしたこともあります。

そんなとき、母が私の小さかった時のことを話してくれました。当時、母は近所に誰も友達がなくて、疎外感を感じたことがあったそうです。私は母の話聞いて、身近な母にもそんなことがあったのかと驚きました。続けて母に聞きました。「じゃあ、そんな時はどうしたの。」すると母は「広報で見た子育て支援センターに行ってみることにしたのよ。」と答えました。私にもかすかに記憶がありました。幼稚園に入る前に、いろいろな子育て支援センターや保育園の子育て支援に行っていた時のことを。私はそこでたくさんの先生や同じ年頃の子に出会い、多くのことを学びました。きっと学んだのは、私だけでなく母も同じであったのでしょうか。初めての子育てでわからないことだらけであった母は、そこの先生や同じ境遇のママ友と会話したり聞いたりするだけで、とても気持ちが楽になり、安心できたそうです。近くに相談できる人がいる、頼りになる人がいたことで心の持ち方が変わってくると言っていました。

虐待をする親だけを責めても、問題は何も解決しないと思います。親だけが子育てするのではなく、社会全体で子育てをしていくという考えが必要だと思います。例えば、困ったことがあったらすぐに相談できる、行政サービスの拡大、親が安心して子育てができる環境の整備など、親を支援していく取り組みを充実させていくことが大切だと思います。私たち中学生にも何かできることがあるはずです。私たちも無関係な傍観者でなく、自らの意識を変えていくことが必要です。なぜなら、私も将来結婚して、子どもを持つ日が来るはずですから。そんな時に自分の子どもを当たり前のように安心して育てられる社会になってほしいからです。そうなったら、きっと児童虐待などない、安心できる社会になっているはずですから。

「十万円」

岡部中学校 2年 大澤 虎太郎

以前、コロナウイルスの給付金として、一人十万円が支給されました。皆さんはどう使いましたか。僕がインターネットで調べたときには、「ゲームを買った。」「～へ行った。」中には配られた十万円で遊ぶ動画などもありました。どうでしょうか。配られた十万円の使い方が少しひどい方が僕には多く感じられました。中には「本当にそれはお金の使い方か」という動画もみられました。たしかに十万円はとても大きいお金です。子供にとって、おこづかいより何倍、何十倍も大きい値です。しかし、本当にそれでよいのでしょうか。今日はそのことについてお話させてください。

コロナウイルスによる外出禁止、給料が減り、お金がなくなり、生活に困る人が増えた中で、その人達を守るためにお国が出してくださった十万円。なぜ国民全体に配られたのでしょうか。十万円という大きなお金を子供に渡すことで、子供のお金の感覚が違う方向へ行ってしまふのは言うまでもないでしょう。以前、宝くじの一等が当たった人はどうなるのかという動画を見たことがあります。その方はありとあらゆることにお金を使い、周りの人も、これをチャンスとばかりに株の話や金借りを行います。そして、お金がなくなり危機感をもっても、感覚が鈍ってしまったせいで元に戻すことができず、そのまま廃人となってしまいました。

お金は大事にすべきと道徳の授業で教わりました。少なくとも子供の頃だけでも、お金は貴重なものとして、扱わせておくべきだと思います。

とはいえ、外出禁止が感染拡大防止にも役立ったことは、テレビの資料数値からも分かります。では、なぜ「第二波」が来る前にもう一度禁止を行なわなかったのでしょうか。そのせいで命を落とした人も少なくはないはずなのに。あるテレビのコメンテーターはこう言っていました。

「もう国のお金がなく、コロナとの戦いでためていた分がなくなってきたから自粛をさせることができないんじゃないか」と言っているのです。少し違うのではないかと私は思いました。たしかに日本のこれからの経済のためには、会社が多くつぶれるのは防がなければなりません。しかし、そのためだけに救える命を救えなくする、感染しなければもっとたくさん生きられたかもしれない命がなくなるのを防がないのはどうかと思います。配られた10万円を遊びに使っている人たちです。僕は少なくともそういう方をネットで20人ほど観ました。二百万円です。それでいくつベッドを用意できるでしょう。PCR検査ができると思いますか。その二百万円があれば失業者も救えたのではないのでしょうか。その二百万円で何人、命を救えたのでしょうか。たしかに、税金は自分たちが払っているお金です。しかし、もし自分がコロナウイルスにかかって病院の人に、「道具やベッド、薬がないので、入院、手術ができません。」と言われ、苦しい立場になったらどうでしょう。相手の立場になって考えることは、小学校の道徳でも習います。覚えていなくても、その能力は人としてしっかり持つておくべきだと僕は思います。たしかに、他人こととしておくのは簡単です。しかし、国はしっかり動いてくれています。あとは皆さん、私も含めた国民の意識の違いだと思います。できることはあります。お金を寄付することだって、できるだけ国や病院の言葉に耳をかたむけたり、その配られた十万円も・・・

初めの問に戻ります。支給された10万円、皆さんはどのように使いましたか。

僕には、他の人には見えない色が見える。これは、僕が持っている「色覚異常」という生まれつきの目の特性のためだ。僕は特に赤と緑の区別が難しい。

そんな風に異常があっても僕は十五年間普通の生活をしてきた。それに、色覚異常でも世界で活躍している人もいる。例えば、俳優のキアヌ・リーブス、タレントの小堺一機、車メーカーホンダの創業者の本田宗一郎などがいる。おそらく彼らは、自分が持っている目の異常を理解し、自分ができること、したいことを探したのだと思う。

僕が色覚異常だと知ったのは最近のことだ。しかし、これまでにこの目の異常で悔しい思いをたくさんしてきた。例えば授業で絵を描いたとき、色を塗っていると

「色をしっかりと見て描いて。適当に色を塗らないで。」

と言われたことがある。僕は見た色そのまま塗っただけだった。しかし、他の人から見ればしっかりと見ていない、ふざけていると思われるのだ。これは僕を含めた、色覚異常の人にとってはとてもつらく、悔しいことだと思う。この症状がある人の中には、信号の色がわからなかったり、色覚異常が原因で警察官やパイロットなどの職業を諦めたりする人もいる。「色覚異常」に治療方法はない。外見では他の人との違いはわからないのに、精神的にダメージが大きく、人生にも関わってくる重い辛さがあるのだ。

自分が色覚異常だと病院で聞いたときは、自分でも受け止められなかった。しかし、病院の先生はこう言った。

「色覚異常は病気ではない。人が生まれながらに持っている個性だ。」

個性という言葉聞いて僕は考えが変わり、心の中のモヤモヤがなくなった。僕が見ている色とみんなが見ている色は違う。でも、それはみんなには見えない特別な色が見えているということだ。色覚異常は「個性」だと言われて、僕は前向きに考えるようになった。

僕と同じ個性を持った人は日本に数百万人もいる。今の時代はその人達が安心して暮らせるような配慮が色々なところにある。例えば、色覚による大学の入学制限はほぼなくなった。赤信号の色がわからない人にはバツ印が見えるようになっている。色覚異常への認識は高まってきた。しかし、先程の僕の体験談のように、僕をおかしいと思う人もたくさんいる。もし、僕が通常色覚の人だったら、僕もこの個性を持った人をおかしいと思ってしまうかもしれない。でも、この個性を少しでも理解していたら、おかしいとは思わず、こういう人なんだと考えて声をかけていると思う。だから、少しでも僕達が持っている個性を理解してほしいと思う。

人は皆、個性を持っている。その個性は一人一人違うと思う。だから、人と違うことをおかしいと思うのではなく、この人はこういう人と理解をしてほしい。色だって、一色だけだったらおもしろくない。いろんな色があるからおもしろい。人も同じで、みんな同じ個性だったらつまらない。みんな違うからおもしろい。僕は、どんな個性を持った人とでも理解しあえる、そんな世の中になってほしいと思う。

『除菌スプレーかけられた』配達業者悲痛訴え。」

「医療従事者への心ない差別や偏見が深刻……。」

みなさんはこのような事実を知っていますか。

コロナウイルス感染拡大が進む現在、医療・物流・販売など私たちの生活を支えてくれる仕事に就く、エッセンシャルワーカーと呼ばれる人達への差別や偏見が、一部の人たちの間では未だに存在します。これを『コロナ差別』と呼び、日本各地で広がっているようです。

そこで、このようなことをする人たちの心理状態を探ってみると、ある心理学者がテレビで次のようなことを述べていました。

「コロナウイルス感染拡大の影響により、活動自粛が求められ、不安やストレスを抱えてしまい、その鬱憤を晴らすために敵を作ろうとした結果、差別や偏見が生まれてしまう。」

コロナウイルスは目には見えない敵で、人々に大きな不安やストレスを与え続けます。そこから差別や偏見が生まれるというのです。

中でも医療従事者への差別・偏見が深刻になりました。

例えば、いつ自分が感染者になるかわからないという不安から、医療従事者の子どもが学校でバイ菌扱いされていじめにあったり、保育所へ預けることを拒否されてしまったりということがあったそうです。

私の父は、臨床検査技師という医療に関わる仕事をしています。最近は特に忙しそうで、家にあまり帰って来ません。父がどのような仕事をしているのか気になり、母に尋ねてみました。すると母は、

「お父さんは、田舎のお年寄りが多い地域でもPCR検査や抗原検査ができるようにして、感染拡大の対策を行い、一人でも多くの命を救おうとしているんだよ。」

と教えてくれました。私は今まで父の仕事について詳しく知らなかったのですが、自分の父が人の命を救うために毎日頑張っていることを知り、とても誇らしい気持ちになりました。

医療従事者の皆さんは、いつ自分が感染してしまうのではないかと不安があるにも関わらず、知らない誰かの命を救うために日々戦いの最前線に立ち続けています。差別をしている人たちも一度落ち着いて冷静になって考えればわかると思います。もし自分が感染者になったらだれに助けてもらうのか、今、このコロナ感染がこの規模で収まっているのは誰のおかげなのかということ。

私はこのコロナ禍で、一つの将来の夢を見つけました。それは『医者』です。いつ自分が感染者になってしまうかわからない不安、差別や偏見の目を周りから向けられる中、それでも自分の仕事に強い責任と誇りをもって今も戦っている医療従事者の皆さんのように私もなりたいです。

今、全世界で広がっているコロナウイルスは人間に与えられた、とても大きな壁だと私は思います。そんなコロナウイルスと戦い続けていくために、今必要なものはエッセンシャルワーカーへの理解とフォローだと私は考えます。これからは差別・偏見を、思いやり・助け合いに変えていきませんか。今の世の中に不安を抱えているのは、あなただけではありません。だからこそ、その気持ちを共有しませんか。きっとそのように周りの人と手を取り合って、心を繋いでいけば、コロナウイルスという大きな壁も乗り越えていけると 생각합니다。

私は、このコロナ禍だからこそ、人々の心に優しさの数が増えていくことを願います。

私が伝えたいこと

東京成徳大学深谷中学校 1年 手嶋 乙葉

「死にたい。」この非常に重い意味を持つ言葉を、私たちはあまりにも軽々しく使います。私も物事が上手くいかないとき、何の違和感なく口にしていました。しかし、ある出来事が私を変えました。

先日、親戚のおじいさんが病気で亡くなりました。とても優しく、笑顔の素敵な方でした。身近な人の死。その死は、私を打ちのめしました。おじいさんは、できるだけ長く生きたいといていましたが、自分の望まない形で死を迎えてしまいました。おじいさんの気持ちを考えると、「死にたい。」という言葉が安易に使っていた自分はずかしくなりました。私は自分の愚かな行動を、反省しました。未熟な私にとって、死は非常に遠いところにあり、本やテレビの中の出来事でしか死を理解できなかったのです。しかし、現実の死は「可哀想」や「悲しい」といったわかりやすい感情ではなく、もっと息苦しい異様な、体中が押し潰される程重いものでした。死の圧倒的な大きさを前に、私はただただ恐ろしさに震えるだけでした。けれど私は初めて、本当の意味で死を感じ考え、その結果生きるということを考え始め、今の等身大の自分で向き合おうと決心しました。

中学生の私が死について考える際に、真っ先に思いつくのは、いじめです。いじめは、心の殺人とも言われています。いじめによって実際に自殺というあまりにも悲しい結末を招いた事例もたくさんあります。日本は、世界中に比べて自殺者が多く、しかも若年層による自殺が年々増加している現実を知り私は驚きました。そこで私は、自分に何かできることがないか考えました。その結果、今の自分にできることは、友達と仲良くすることだと考えました。友達みんなと仲良くなり、悩みができれば互いに相談し合える関係になれば、いじめがおこっても自殺は防げると思います。そして、この行動で一人でも多くの「死にたい。」と考える人が減ることを信じています。

私は、親戚のおじいさんの死以来もう二度と「死にたい。」という言葉は使っていません。そして、これからは誰にも言ってほしくありません。しかし、世界のどこかでは、今日も誰かがこの言葉をつぶやいているかもしれません。いじめ、ハラスメント、孤独死、災害、戦争など、私たちの周りには、たくさんの絶望があふれ返っています。その真っ暗闇の絶望の中では、どんなに強い人も無力で、希望という光が一時的に見えなくなっていて、この世から自分という存在を消すことが、最良の選択だという誤った考えに至っている人もいるかもしれません。しかし、それは絶対に違います。本当に死にたい人なんて、この世界に一人もいません。みんな本当は家族や友達や恋人、大好きな人達と笑いながら、一緒に生きていきたいと思っています。誰もが自分なりの幸せな人生を最後まで全うし、生き抜いてみたいと思っています。

私は、声をあげて言いたいです。絶望の淵に今立とうとしている人に伝えたいです。あなたに生きてほしい。生きることに背を向けようとしている人に、私は「あなたの味方だよ」と呼びかけたい。私と同じ気持ちを持つ人が、この世で一人でも多く増えてほしいと、私は心から願っています。

最高の結末に向かって

深谷市立深谷中学校 3年 鶴養 理紗

「『終わりよければ全てよし』だから、今はまだやらなくても大丈夫。」

これは、私が休校中に言った言葉です。私はそう言って、やるべき事を後回しにしていました。しかし、本当にそれでいいのか疑問に思い、考えてみることにしました。

そうしてしばらく自問自答していると、あることに気がつきました。あることとは、「終わりよければ全てよし」には、続きがあるのではないか、ということです。この言葉の意味は「たとえ物事の過程がよくなかったとしても、結末がよければそれでいい」という意味です。しかし、私はその言葉の後に、続きを付け足す必要があると思います。それは「だが、過程で最善を尽くさなければ、終わりはよくなる」という言葉です。こうすることで「たとえ物事の過程がよくななくても、結末がよければそれでいい。だが、過程で最善を尽くさなければ、結末もよくなる」という意味になります。つまり、結末をよくするには、それまでの過程で失敗したとしても、その失敗であきらめるのではなく、次へと生かして最善を尽くすことが何よりも大切である、ということです。一見、矛盾しているかのように思えるかもしれませんが、しかし、具体的に考えてみると納得できると思います。

例えば、スポーツ選手です。この世界には、多くのスポーツ選手がいます。しかし、その中で試合で活躍したり、点を決められたりすることができる選手はごくわずかです。ここで、試合での活躍を結末、試合までの練習を過程として考えます。試合で活躍することができる選手は、厳しい練習を乗り越え、たくさん努力してきた選手だけです。つまり、過程でたくさん努力し、最善を尽くすことで初めて、良い結末につながっていくのです。また、逆に考えても同じです。結末がよくなかった選手の中に、過程、つまり練習を全力で行わなかった選手がいるのでしょうか。私はいるとは思いません。つまり、物事の結末がよかったのは、過程で最善を尽くすことができたからなのです。

私も、小学生の頃に、この言葉を実感した経験があります。それは、ミニバスでの出来事です。私は、6年生の時に足をけがして、1ヶ月以上バスケットができなくなってしまいました。しかし、あきらめることなく、1回の練習で100本以上シュートを決める、という目標を作り、たくさん努力しました。けがが治って1ヶ月が経った頃、試合がありました。私たちは、何とか準決勝まで進むことができました。その試合は1点を取り合う接戦で、私のチームは残り15秒の時、ギリギリ1点差で勝っていました。誰もが勝利を確信した瞬間、相手にフリースローを決められ、惜しくも1点差で負けてしまいました。それから、今まで以上に真剣に練習に取り組み、次のミニバス最後の大会に向けて、たくさん努力しました。すると、その大会がこの言葉を物語る結果となったのです。なんと、私たちは今まで勝ったことがなかった2チームに勝ち、ブロックの中で優勝することができたのです。今思うと、この経験は、失敗してもあきらめずに努力した結果だったと思います。

これは、全てにおいて言えることで、受験においても同じことが言えます。結末は受験の可否、過程がそれまでの勉強です。つまり、受験までにたくさん努力すれば合格でき、努力しなければ合格できません。高校合格後も、新たな目標、そして将来に向けて歩いていく、その繰り返しです。だから私は、過程である今、よい結末に向けて、最善を尽くしたいと思います。今生きているこの1秒1秒が過程です。1人ひとり、目指す結末は違っても、よい結末を迎えたいという思いは一緒です。皆さんも私と一緒に、今できる最大限の努力をしてみませんか。結末を迎えたその時に後悔しない為に。最高の結末に向かって。

毎日のように、親から暴力をふるわれる。けれど、誰も助けてはくれない。絶対的な大きな逆らえない力のものでじっと我慢するしかない。辛くても辛くても耐えるしかない。そんな、児童虐待を受けている子供の気持ちを考えると胸が張り裂けそうな思いに駆られる。私自身は、そのような経験をしたことはない。しかし、^{ひとごと}他人事に思わず、困っている子供を、家族を支えられるような社会にしていくべきだと思ふし、しなければならぬと思う。親だけに責任を負わせるのではなく、周りも支えなければならぬ。面倒ごとには関わりたくない、で終わるのではなく、自分にできることを考え、行動を起こさなければならぬのだ。

虐待死。虐待による死亡。その事例は日本では年間50件を超えているらしい。一週間に一人の子供が命を落としているのだ。おそらく、この事実を知らない人はたくさんいるだろう。私も、児童虐待について調べてみるまでは知らず、この事実を知り驚愕した。多くの尊い命が失われているこの責任は、社会にもあると言えるのではないかと思う。

児童虐待の防止に関する法律。それについて、詳しく知っている人は多くはないだろう。私自身も、存在は知っていたが、どのようなものか具体的にはわからない。実際、母や姉も詳しくはわからなかった。そこで、児童虐待防止の法律について、少し調べてみた。

日本には、もともと子供を守る、福祉法というものが存在したらしい。この法律には、児童虐待を発見したら通告の義務があること、虐待が疑われた家庭には立ち入り調査をしてもいいこと、一時保護や家庭裁判所への申し立てなどが書かれている。しかし、通告の義務があることに、大多数の国民の認識度は低く、保健所は立ち入り調査には積極的ではなかったらしい。家庭裁判所への申し立てについては、申し込みのやり方がわからないなどの理由から、ほぼ皆無に等しい状況だったらしい。このような状況の中、だんだんと子供への虐待が社会問題となり、児童虐待への対応の法律を求める声が高まった。そこで、2000年に児童虐待の防止等に関する法律の立法が実現した。一時保護の期間など、曖昧だった点をはっきりさせることなどを行ったのだ。その後、この法律に二度の改正が行われた。一度目の改正で通告義務の拡大や、警察署長への支援要請などが行われた。以前と大きく変化したのが、第1条で、「児童虐待が、児童の人権を著しく侵害するものである」と明言されたことだ。もちろん、児童に人権は存在するのだ。人権とは、すべての人々が生命と自由を確保し、それぞれの幸福を追求する権利。人間が人間らしく生きる権利で、生まれながらに持っているものだ。すべての人が安心して暮らせる社会にしていくため、一人ひとりが、この問題についてよく考えなければならぬと思う。

今現在、新型コロナウイルスが全国に蔓延し、多くの人々が自宅にいる時間が増加している。普段と違うことでストレスが溜まりやすくなり、自ずとそのイライラが同居人に向くことが多くなる。そこで、子供同士の喧嘩が絶えないという母親が「優しくなれるテント」というものを作った。イライラしたり感情が昂ったりしたときにはそのテントに入り、心を落ち着ける。すると、自然と泣き止むことができる、というものをニュースで見た。とても面白いアイデアだ。こんな風に、一人で落ち着ける場所が、子供だけでなく、大人にも必要なのではないだろうか。大人も子供もストレスが溜まり、児童虐待が増えているらしい。^{いつとき}一時の感情に惑わされず、自分自身をよく見つめ、冷却する場所と時間が大人にも必要なのだ。そんな場所を作ることができれば、児童虐待も減るのではないかと思う。

児童虐待を少しでも減らすために、オレンジリボン運動というものが行われている。オレンジリボンは、子供たちの明るい未来を表していて、子育てを温かく見守り、お手伝いする意思がある、というマークでもある。オレンジリボン運動についてのホームページには、私たち一人ひとりが子育てに優しい社会にしていくことが虐待防止に繋がる、と書いてあった。このことから、一人ひとりが虐待についてよく知り、よく考え、社会全体で見守る、助ける、という認識にしていくことが私にできることであり、しなければならぬことだと思う。

現在、世界では、新型コロナウイルス感染症が流行しています。感染は留まることを知らず、コロナ関連のニュースが連日報道されています。

忘れもしない二月二十七日。部活動後に、帰宅した私の目に飛び込んできたのは、あまりにも衝撃的な報道でした。

『三月二日から臨時休校…。』

昨日まで当たり前に通っていた学校に、行くことができない…。その想像もできない現実を突きつけられ、私は大きな不安に押しつぶされそうになったことを覚えています。

そして三月。自由に外出ができず、また私たち中学生は、登校することさえできない日々が始まりました。そんな中、『新しい生活様式』が生まれ、私たちを取り巻く環境は一年前とは大きく異なるものとなりました。

『三つの密(密閉・密接・密集)を避けてください』

『人との距離を二メートルあけ、マスクを着けてください』

今まで経験したことのない人との距離感に戸惑いを覚えながらも、何とか新しい生活様式に慣れようと、日本中が手探りで前に進む日々が続きました。

私は、この外出自粛期間中に気づくことも多くありました。それは、日常の中に本当の幸せがあるということ、そして私たちはその幸せに気づかずに生活している、ということです。

私たちは、食料品や生活必需品がなくなるとスーパーやコンビニなどの店舗に出向き、いつでも欲しいものを手にすることができます。たった数か月前まで、これは当たり前の行動でした。

しかし、外出自粛期間中は、買い物に行くことさえできません。『無くなったら買いに行く』という、物にあふれている便利な生活は、当たり前ではないのです。

そして、今まで考えたことのない、『物の流通』についても考えるいい機会になりました。それは、商品が店舗に並ぶまで、多くの人が携わっているということです。通常とは異なる環境の中でも、懸命に働いている方々がいると思うと、私たちの生活は多くの人に支えられていると感じます。欲しいものが手に入ること。それを当たり前だと思わず、感謝の気持ちをもって生活していきたいです。

コロナ禍の中で思ったことがもう一つあります。それは、人は自分の身に危険が迫ると、心に余裕がなくなってしまうということです。

新型コロナウイルス感染に関係する報道の中には、感染した人に対して『対策をしていなかったからだ』と誹謗中傷をしたり、夏季休暇を利用して地元へ帰省した人に対して、『周りの人の気持ちを考えろ』などと暴言を吐き、ひどい扱いをしたりする人もいます。

自分の身に危険が迫った時、その危険から遠ざかったり、逆にそれを遠ざけたりするのは、人間の本能だと思います。しかし、その本能によって他者を傷つけるのは間違っていると思います。

感染したくて感染したわけではありません。誰がウイルスの発生源なのか犯人捜しをするのではなく、今は、どうやってこのコロナを終息させるかを考える方が大切なのではないのでしょうか。

今後、コロナが収束しても、またほかの疫病が流行しないとも限りません。そのような事態になったら、手と手を取り合って助け合い、思いやりをもって壁を乗り越えるしかありません。

私は、『コロナウイルス』という、生まれて初めての危機に直面し、様々な視点から物事を見ることができるようになったと感じています。このような状況だからこそ、マイナスの感情に引っ張られるのではなく、自分たちに何ができるのかを考え、行動していくべきだと思います。また、コロナ禍の中、懸命に戦ってくれている人たちがいることを忘れず、日々感謝の気持ちを忘れずに生活していきます。

ある夏の暑い日でした。汗で髪が張り付き、「鬱陶しいな。」なんて思っていた時のことです。とある報せがきました。その内容を聞いた私は暑さなんてどこかにいき、あっという間に身体が冷えていく気がしました。それは、知り合いが自殺未遂をした。という報せでした。最初は、信じる事ができませんでした。自分の中に、そんなことあるわけない。自分には縁遠いものだ。と根拠の無い確信があったからです。それはひとえに、私が何も考えず、悠々と日々を過ごしてきたことの証明に他なりません。しかし、いくら疑っても嘘だと言ってくれる人はいませんでした。当たり前でしょう。紛れもない事実だったのですから。そこで今まで生きてきて、初めて「死」というものを明確に意識しました。私が、どこか他人事ひとごとのように思っていた、この行為は、誰にでも潜んでいるものなのだ。と、この時初めて知ったのです。

それから私は自殺について調べるようになりました。そして、そこで自ら死を選ぶ人の多さを知りました。例えば、令和元年。その1年の間、日本国内だけで20169人が自殺によって亡くなっています。私の知り合いのように未遂で終わった人も含めたら、一体何人になってしまうのでしょうか。その事実を知った時は驚くとも言えない、恐怖のような感情が込み上げてきました。まるで、今まで生きてきた世界を否定されているような気分でした。自分が当たり前のように幸せを享受し、生きてきた世界が足元から崩れていきました。

そこから、詳しく自殺について調べることが増え、さらに記事を見たりするようになりました。そこで、世間の意見を初めて知りました。厳しい言葉をかける人も、やはりいました。それがなぜだか、私にとっては悔しくて仕方がなかったのです。何も知らないくせに。私だって何も知らない。可哀想だと思わないのか。可哀想だと思ってほしいのだろうか。自問自答が続きました。結局、その時は答えにたどり着く事ができませんでした。

記事を調べたりする中で、胸を痛めることは少なくありませんでした。「そんな一つ一つ気にしていたら生きていけないよ。」なんて言われたこともありました。なんの反論も出ませんでした。その通りだと思ったからです。ですが、納得することはできませんでした。正しいと認めてしまったら自分を嫌いになってしまう気がしました。間違っていない。でも、正解である気もしない。そんなふうを考えを巡らせていると、ふと、あの時の自問自答を思い出しました。正解を求め、考え続けていたあの時間。本当は、正解なんてなかった。そう考えると、全てに納得がいくのです。正解なんてない。不正解もない。それに気づいた瞬間、少し心が軽くなった気がしました。正しい行動ができているのだろうか。これでいいのだろうか。と、考え続けていた自分を認められるように感じました。

その結論にたどり着いた今、私は胸を張って言いたいのです。人の死から目を背けるのが上手な生き方だ。というのなら、私は、生きにくくなろうと、心を痛める結果になろうと、事実一つ一つを受け止めていきたいです。自己満足だ。いらぬ世話だ。と言われても、悩んでいる人の話は聞いてあげたい。何より、人の死から目を背けることは絶対にしてはいけないと思うのです。他の人にどんなことを思われても、言われても、本当の正解なんてきつとでないのだから。だったら私は、自分が正しいと思うことをして生きていきたい。そうすれば、自分を好きになってあげられる気がするのです。そしてこれが、初めて曲げたくないと思った私の信念で、私にとっての正解。やっと見つけることができた、私の生きる意味。

ある日、ふと目にした言葉、「20年後には、現在の仕事の49パーセントがなくなる。」の文字に私は目を見張りました。仕事の半数近くがAIにゆだねられるというのです。

そもそもAIとは何なのでしょう。私たちは人工知能という言葉をよく耳にします。AIは膨大な知識量と高度な処理能力をもっています。その点で、人間は全くAIに歯が立たないでしょう。そう考えれば、現在人間が行っている仕事がAIに替わられるということが真実みを帯びてきます。それ以上にAIの能力のすごさは、「自力で学び、自力で動く」というところにあります。実は、これこそが唯一AIと人間の共通点なのです。AIも人間も失敗を重ねることで精度を高め、その過程を通して成功へと近づいていきます。このように、AIの能力を考えれば、やはり人間はAIに劣っている存在だと言わざるを得ません。しかし、本当にそうなのでしょう。私は「NO!」と答えます。AIと人間には、決定的な違いがあると、私は確信しています。私の体験談を聞いてください。

陸上部員として、私は新人戦に向けて練習に励んでいましたが、大会の一週間前に足に違和感を覚えました。それでも私は走り続け、迎えた当日、痛み止めを飲んで出場しましたが、痛みと不安を抱えて走りきったものの、目指した目標とはほど遠い結果となりました。AIだったらあの時、私にどんなアドバイスをしてくれたのでしょうか。きっと、私の中の無駄を一切省いて、最短でより合理的な解決策を示してくれたでしょう。あのときの状態だったら大会は棄権すべきだったと結論づけるかもしれません。しかし、それは本当に最善の解決策なのでしょう。私はそうは思いません。人間は失敗や無駄の中から何か大切なものを得る生き物だと思うのです。それは、AIが大切にしている何かとは違う何かです。現に私は、大会での悔しさからフォームやメンタル面の強化など、迷いながらも自分で課題を見つけ、解決策を見つけました。どれだけ陸上が自分にとって大切だったかということも再確認できました。AIからは合理的な練習方法を教えてもらうことはできるでしょうが、陸上に対する情熱は学べないと思います。少し強がって言えば、私は無理をしてでも走りきった自分をちょっぴり誇りたい気持ちになりました。つまり、人間は失敗したとき、困難に直面したときにそこで味わった悔しさや苦しさ、辛さを乗り越え、一見無駄に思える体験をプラスに変えて自分の力にしていく生き物だと思うのです。そして、それらの人間の知恵は、遺伝子として代々受け継がれてきたものなのです。お年寄りから若者へ、地域の中で、職場や学校で、様々な場面で脈々とつながってきたものなのです。AIに遺伝子はありません。私たちは人間のもつ、絶対にAIには真似のできないこの知恵を、自分に、家族に、社会に、そして未来に、生かさなくてはならないはずです。

三年生の私は、陸上部員として11月まで駅伝の練習に取り組んできました。1月には私立入試、2月には公立入試を控えながら練習に時間を費やしました。AIならそんな私に、練習時間を勉強時間に変えて受験勉強をするべきだと忠告するでしょう。しかし、私は、短時間に集中する力、効率的なやり方、一分二分を生み出す力を身につけました。部活を引退してすぐに下校する友人を横目で見ながら走っていた私に焦りはありませんでした。今、私は自分の目指す進路にまっすぐに向かっています。これからの人生にはたくさん失敗があるでしょう。うまくいかないこともあるでしょうが、失敗を失敗で終わらせないように、一つ一つの経験を自分の力に変えて、前向きに精一杯生活していきます。